寫眞報

內閣情報部編輯
一月十八日・第四十八號・十七ン

大命を拜して

内閣總理大臣　平沼騏一郎

支那事變は既に第三年を迎へ、著戰果を收めて今や新しい段階に入りました。是れ偏へに御稜威の下、忠勇なる將兵諸士の奮闘と銃後國民の熱誠とに依るものでありまして、實に感激の外ありません。殊に長期に亘り各地に轉戰し、幾多の艱難を克服し而も連捷を重ねつゝある我が將兵の方々に對しましては心より感謝致すと共に、護國の英靈に對しましては深く哀悼の意を表する次第であります。

支那事變に對處すべき帝國の方針は、最も聖斷を仰き奉りました確固不動のものが存するのであります。前の内閣は之に基いて諸般の施策を進めたのでありますが、新内閣に於きましても勿論此の不動の方針に基きまして、あくまで所期の目的達成に一路邁進するのみであります

固より時局の前途が愈〻多難なるべきことは察するに難くないのでありますが、此の難局を打開し光明ある前途を拓く爲には、國家の總ての力を此の目的貫徹に集中すべきは言を俟たざる所であります。從つて今後の政策の重點は綜合國力の擴充に置き、廣く世界の狀勢を注視して之が運用に當りたいと思ふのでありまして、既往に泥まず、新奇を街はず、專ら國家總動員態勢を强化して内外各般の國策遂行に當るつもりであります。

申すまでもなく、我國の政治の基礎は、全國民が如何なる職業にあつても各〻その分を盡して皇室を輔翼し奉る萬民輔翼に存するのであります。それ故に假令如何なる國難に直面しても却つて益〻一致團結、國體意識を强化して之を克服し來つたのであります。先般の開院式の御勅語の中に仰せられた如く、此の傳統的國民精神の昂揚と國家總力の發揮こそ、東亞に於ける新秩序の建設といふ大業を完成する最も大事な要件であります。

私は大命を拜しました上は、聖旨を奉體し、粉骨碎身、御奉公申し上ぐる決心であります。全國民諸君に於かれましても、此の心事を諒とせられ、擧國一致、協力せられむことを切望して已まぬ次第であります。

一月六日の放送から

撮影　松本要之助

五萬突破（十月末）

九億圓突破 —高約契—

ボクタチハ
フコクノ
チョウヘイホケント
シュッセホケンニ
ハイッテユス

富國徴兵

駐在　東京・日比谷

八達嶺に立つ

一昨年八月下旬、わが○○部隊の勇士たちが、北にし員上高原の長城を攻撃と神んで執拗に抗する敵に遂二無二血と肉の突撃を繰り返して奪取した八達嶺の地に平和三年の春が訪れた。

激しかつた戦の跡は今もなほ到る所に生々しく遺つてゐる。時折たゝる長城壁の銃眼は一つ一つも数へられ、凄壮な激戦は無論に打ち砕かれ、城壁附近の山腹にはあちらこちらも大きな黒煙天井にお開けたまゝになつてゐる。

敗残兵は今もなほ時々出没するので、わが勇士は怠るやうな朝風の中を警備についてゐる然し、わが占領以来一年有餘、皇軍治安部隊の努力は北京と張家口を結ぶ京綏線を交通し線路の両側を六百の守り明瞭に確保列車は走つてゆく。線路近傍の部落には住民も増え、牛馬の声、鶏の鳴く音も去年よりは著かに賑やかになつた。明け行く北支、曙光を浴ぶ八達嶺の頂きから眺めるとしみ〳〵東亜の暁を身に感じる。

猛戦のあとを物語る城壁の蔭に毅然と立つわが警備兵、身を切る朝風をぐつとこらへて新支那の平和を護る男士の顔は逞しい。

騾馬を引く農夫、小牛を追ふ少年が部落から現はれた。春はまだ浅いがほのかに土の香がする。農夫も少年も旅行者ににこやかに挨拶してゆく。彼等にも生活の喜びが生れたのだらう。

撮影　吉田　潤

蜿蜒と連なる長城を望楼の砲弾穴から眺む。大の望楼、その次の望楼とどれもこれも無残に破壊されて、土も草も血に染めて突撃したわが皇戦のあとがそゞろ偲ばれる。

京綏線が河北から察南に入らうとする省境に青龍橋といふ小駅がある長城が目前に迫つてきてゐる。寒いプラットホームにわが警備兵がちつと立つてゐる。大きな包みを背負つた支那の農民が三人、警備兵に敬礼儀をして汽車に乗込んだ。

陸の艨艟 戰車隊

陸軍戰車學校

陸軍では次の戰ひに備へて勇猛果敢な戰車隊員の敎育、充實に大いに力を注いでゐるが、千葉市外の陸軍戰車學校には、戰車聯隊歩兵聯隊から選拔された優秀な將兵が連日嚴寒の中を油まみれになつて猛訓練をうけてゐる。

戰車隊員にとつて整備といふ作業は最も重要なもの、一つだ訓練がすめば記によごれた車體を注ひ、殊に機關を完全に整備してをくために、晩飯を食ふことも忘れて働きつづける。若し萬一機關に故障が起れば猛牛も全くその機能を失つてしまふからだ。

念願配屬の訓練、やりとならんだ練習用卵戰車はいま敎官の一進め！の號令を待つてゐる。猛牛部隊は山も川も勇敢に突き進まねばならぬ。

撮影 加藤泰平

操作、戰闘の訓練がすめば、遠く演習地に行軍を行つて、實戰宛らの演習をやる。白雪に覆はれた富士の裾野に戰闘隊形をとつた猛牛部隊は今や將に果敢な突撃を試みようとする。

近代戰と戰車

陸軍省情報部

戰車の本領は卓越せる機動力、火力、踏破力並に裝甲威力に依り率先敵を壓倒蹂躙し、友軍の志氣を鼓舞作興し、以て全軍戰捷の途を拓くに在りとはわが國の戰車隊敎練規定の總則第一に明示してある所であるが、歩兵に數倍する速度をもつて地上を疾驅し、鋼鐵の無限軌道に電線や急拔森林や鐵條網を蹂躙破蹂躙し、雨と降り注ぐ敵彈を厚い裝甲鈑に拂ひのけ、敵陣の中に飛びこんで機關銃や大砲の彈を敵に浴びせかけ踏みにじり、縱橫無盡に暴れまはる姿は天魔鬼神ともいふべく、地上の怪物、近代戰の花形といはれるのも無理はない。この戰車が始めて戰場にその勇姿を現したのは歐洲大戰の時であつて、開戰第三年の秋英軍がひそかに準備した所謂タンクを、西部戰線の北翼に近いバポーム戰場に使用したのを嚆矢とし、その後各所の戰場に使用されたが、獨軍はこの橫艦時代の戰車の缺點を指摘するに急であつて、その利點を伸ばす事を忘れ、大したものでは無いと、多寡をくゝつて居た間に、英佛軍では鋭意研究をつゞけ、且極秘裏に多量にこれを整備した。その結果一九一八年夏獨軍の乾坤一擲の大攻勢に際しては新型戰車が佛軍の陣頭に滅爽の姿を現して獨軍を叩きつぶし、引き續き八月には英佛聯合して四百臺の戰車を陣頭に押し立てゝ攻勢に轉じ、獨軍の戰線を突破してこれを東方に壓し、遂に休戰を乞ふの已むなきに至らしめ、歐洲大戰に最後のとどめを刺したのである。

この偉大な戰力に驚いた列強は、大戰後智腦を傾けて戰車の研究を積み、發動機關の發達と冶金術の進歩とは相俟つてこれに長足の進歩を遂げさせた。即ちその速度に於て、火力、裝甲威力に於て往時の比でなく、最近においては水陸兩用戰車、土龍戰車、飛行戰車等迭現出し、今や地上兵器中に於ける最新科學最新技術の粹として戰車に比肩するものはないのである。將來戰に於ては機關銃數は益々增加し、軍の主兵たる歩兵が突撃を以て敵を驅逐しその陣地を奪取するには、如何しても此の殺人吸血鬼機關銃を撲滅せねばならぬのであるが、これに最も適した兵器は戰車である。また長期戰の不利を避け、戰鬪を早く決勝に導き、速戰速決の利を收めるものは奇襲的に敵に大打撃を與へ、又廣大なる地域に亘り隨時隨所に偉大なる戰力を集中發揮出來る戰車が絶對に必要なのである。

わが國の戰車の研究は英佛より遲れてゐたが、關係當局の熱心な研究と製造業者の非常な努力とによつて最近長足の進歩を來し、今や先進國を凌駕して世界の脚光となつてゐるのである。今次事變に於て如何に戰車が偉大な効果を發揮し、全軍戰捷の途を拓いたかは北支、上海、徐州、廣東、武漢の諸作戰に於て國民が齊しく認める所である。

然しながら如何に戰車が技術的に優れてゐようともこれを動かす將兵の能力が劣つてゐては何もならぬ事はかの張鼓峯事件に於て蘇軍戰車數十臺が空しくわが軍のために擊摧されて何等の効果をも來さなかつた事でもわかる。わが戰車の威力は傳統の大和魂を體し、日夜猛訓練によつて鍛へられた將兵に使はれる事によつて、益々その威力を發揮するのであつて、かの昭和の軍神と仰がれる故西住大尉の如き戰車の生んだ精華であるが、この精神はまた皇軍戰車隊の全將兵が齊しく持つて居る所である。

現在蘇聯はその厖大なる重工業力を傾けて飛行機と戰車との擴張に努めてをり、その現有兵力は優に七千臺を超え、戰闘に際してはその莫大なる戰車を以て敵陣地の全縱深を同時に制壓し（所謂面的攻撃）、又空中より敵の後方に兵力を繰返して立體包圍を行ひ、一擧に勝を制しようとしてゐる。帝國の東亞經綸の進捗に伴ひ北方の風雲は日にまし急となりつゝあり、帝國が東亞新秩序建設の國是を完遂する爲には急速に軍備を擴充整備するの要があるのであるが、戰車隊の擴充はこの重要ポイントとして航空兵力の擴充に次いで急務中の急務と思はれるのである。

軍神・西住・大尉

戰地に活躍當時の軍神西住大尉

軍神西住大尉が徐州の野に華と散つてから八ケ月、その輝かしい戰功、偉大なる軍人精神はいまわれら一億國民の感激と崇敬の的となつてゐるが、こゝに掲げる原稿は西住大尉の當時の部隊長であつた細見大佐が、昨年十二月二十六日夜惜しい部下を偲ぶ切々たる情をこめて東京中央放送局から全國に放送されたる軍神の思ひ出である。

⇨軍神西住大尉の部隊長であつた細見惟雄大佐（右）と、隴海線遮斷に偉勳を樹てた岩仲戰車隊隊長岩仲義治大佐

西住大尉が戰死を致しまして丁度七ヶ月、上司の指示によりまして只今「マイク」の前に立ち大尉の思出を語りますことは、當時の部隊長として誠に意義あることと存じます。然しながら西住の性質を知りまする私は、西住がこの事を欲して居ないのではないかと深く懸念する次第であります。これから後大尉の精神を顯彰して下されまする方々においても能く西住大尉の本當の精神や性格を把んで頂きたく御願を致します。

大尉は昨年八月戰車小隊長として出動、寶山城の戰鬪を初陣として羅店鎭、大場鎭、南翔、南京の戰鬪を經て本年春徐州會戰に於て戰死したのであります。この間周家宅の激戰で戰車壕を突破して敵の後方陣地に殺到しましたことや、羅店鎭の手前で敵の砲兵陣地眞近に突進致しましたことや、その他白壁攻擊に敵を粉碎し、張家樓下宅の戰鬪に敵の逆襲部隊の眞只中に唯一車を以て跳り込み、大場鎭突破後の追擊戰に最先頭を以て蘇州河に進出し、南京の攻略戰に中華門外に奮戰致しましたことなど、大尉の勇敢なる行動の思ひ出は誠に盡きないのであります。その中、大尉の如何なる人物でありましたかを能く窺ふことの出來まする南翔鎭路畔の戰鬪の一部を申上げます。

昨年十月三十一日、大尉は隊長代理として戰鬪に參加しました。敵線に堅固に守備する敵陣地に率先突入、歩兵の突擊を誘導しましたが、戰鬪中日が暮れて戰車の戰鬪は困難になりました。敵はこれに勢を盛り返し、猛烈な射撃と肉迫攻擊とを致しますので、味方の歩兵には死傷者が續出して、敵の第二線第三線への突擊は愈々困難になつて參りました。大尉はこの情況を見て、斷乎敵の陣内に踏み止まつて戰鬪を持續したのであります。暗の中に活潑に動く大尉の戰車は自然敵の目標となり、敵彈雨の如く降り灑ぎ、裝甲鈑に命中する彈丸は碎けて火花と散り隣の戰車から見た大尉の戰車は、火柱の樣に見えたと兵隊が後で申して居りました。今東京に送り返へされて來ました西住戰車の砲塔の右前の彈痕は、この時の痕であります。その中に大尉の戰車は敵の手榴彈の集中攻擊を受けて前照燈の所が破壞せられ、正面に大きな孔が開き、頗る危險になりましたので大尉は操縦手、射手の身を側方に寄せさせて、自分は戰車の天井にぶら下り、兩肢を開いて尙も戰鬪し且つ指揮したのであります。この頃敵は益々増長し盛に手榴彈を投ずる樣になりましたので、大尉は遂に敵兵を踏みつぶすに決心を致し「蹂躙」「蹂躙」の命令を下しつつ、敵陣内を左右して指揮したのでありまして、誠に鬼神をも避けしむる壯烈なる場面であります。その中に歩兵の攻擊も進捗しその一部を占領するに至りましたので、命令に依り陣内から出で參りました處が、この時大尉は部下の一部の戰車が居らないのを發見しまして、直ちに自ら車外に跳出し搜索しました。然しながら何れにしろ眞暗な上に雨が降り頻り、敵彈は盛に飛んで來る、それに四周には敵兵の號令や、わめき騒ぐ聲が手に取る樣に聞える敵の中のことですから、中々に見つからない、百方手段を盡して、漸く二時間位後に發見しました。一時方向を迷つて、行方不明になつた山根小隊長が到着しまするや、大尉は「山根來たか！お―

一月八日觀兵式を終へ、市中を行進した戰車隊は最後に今は亡き戰友の英靈を弔ふため靖國神社に詣でた。

よかつた、よかつた」と繰り返し堅く堅く山根の手を握つて、後は涙で次の言葉が出ない。山根は「御心配かけました」小隊は無事後尾に到着致しました」と報告は致しましたが、これも亦感極つて泣いてしまつたのであります。午前一時頃と記憶致します。大尉は暫く歸つて來ました。陳家白墻といふ部落の不潔な支那家屋の中で待つて居た私の所へ報告に來ました。「ローソク」の光に照らし出された大尉は雨の爲めに頭からじつくり濡れて油と泥で汚れた顏には、戰車帽から流れる幾條かの雨しづくが光つて、その充血した眼と共に如何に本日の戰鬪が惡戰苦鬪であつたかを一目に感ぜしむるものがあつたのであります。大尉は毅然と戰鬪の情況、死傷者の報告を終へてから戰車帽を脫ぎ、雨のしづくを打ち拂ひながら「伺うも大變遲くなつて御心配をかけました。今日はすぐ夜になつて、射撃も運動も出來なくなりましたが、歩兵が今晩中にあの陣地を奪らなければ明日は非常に苦戰をするだらうと思ふたり又歩兵のあの苦勞を見ては、何うしても引上げる氣にはなれなかつたので、無理な戰鬪とは思ひましたが戰鬪を續けました。歩兵が戰車、戰車と頼りにしてゐましたので、今頃は淋しがつて居るでしよう」なとと申して居りました。

ふと氣がつくと大尉は顏に、手の甲に、左脚に、敵の彈片を受けて負傷して居ります。而もこれに對しては「一寸やられました。脚は少し痛みますが、大したことはありません」なとと、にこにこ笑つて今迄の緊張は何時の間にか解けて、炭火の側で山根小隊行方不明の時のことなとを冗談を交へて話しながら負傷の手當を受けました。翌日は板ぎれで作つた下駄を穿き、杖をついて、野戰病院に部下の重傷者を見舞ひ、終日枕邊に在つて慰めてゐました。

西住大尉、西住大尉はこんな人物でありました。

次に大尉戰死の情況に就いて申述べます。

本年五月十七日、大尉の屬する高橋隊は、徐州戰宿縣附近に於て敵を攻擊しましたが、敵前突然「クリーク」にぶつかりました。大尉は勇敢にも單身戰車から飛び出して偵察し、通過地點を發見しましたので、戰鬪中の隊長戰車に向つて走つて行きました。この時です。敵の狙撃を受け、敵彈右內股に命中し衣囊に入れてありました時計（今私が茲にこの「マイクー」の前に持つて來て居ります時計、西住の血が滲つてゐます）を裏から表に貫いて動脈を破りました。大尉は遂に畑中にどつと倒れました。然し氣丈な大尉は近づく隊長に「負傷は腹部の樣ですから大丈夫です。部隊は左の方から敵を攻擊して下さい」と意見を述べ、戰車の中に搬び込まれましたが出血甚しく、乘務員必死の手當も及ばす、だんだん力が拔けて、再び立つ能はさるを自覺したのでありませう。自分を介抱中の高松上等兵に、（これは西住の教育した初年兵です）「御前達と僅か一年で別れるとは思はなかつた。自分が居なくなつても平素自分が言ふてゐた軍人の魂、軍人精神を基として、小隊長殿始め各幹部方の教へに從ひ、立派な軍人にならなくてはならん」と諭しております。態々死が目睫の間に迫りまするや、自若少しも取り亂すことなく、次の最後の言葉を遺しました。當時戰車は轟轟と、眞暗な畑中を一意本部の位置に走つて居ります。その中で「部隊長殿、隊長殿、西住は御先に滿足して往きます。しつかりやつて下さい」

御母樣、小次郎は御先に往きます。自分は滿足して居りますが、御母樣は御一人で淋しい事と思ひます。可愛がつて頂きました。姉さん色々御世話になりました。弟……立派に……」尙言葉が若干ありますが已に力なく、又戰車の中で聞き取ることが出來ません。

天皇陛下萬歲を三唱し奉り、後は一語なく、遂に常に生死を共にしたるその戰車の中で、眞に從容として名譽の戰死を遂げたのであります。

部隊の至寶西住は、壯烈なる戰死を遂げたのであります。年僅かに二十有五。噫！

これより先私は、主力の戰鬪を終へて夜九時頃歸つて來ました。その時朝から高橋隊に連絡に出して居りました品川大尉が大急ぎで歸つて來ました。人を拂つて特に小さい聲で、西住負傷、ここに來る迄危いらしいと云ふことを告げます。部隊としては重大な事であります。

戰車は尙も大尉の遺骸を乘せたまま、眞暗な畑中を驀進に驀進を續け、落命後三四十分にして本部位置に到着致しました。然し已に親愛敬慕するわが西住中尉は去つて呼べど答へずでありました。戰車から靜かに外に出されて、眠る西住の遺骸の周圍には忽ち隊の將兵が集まりましたが、有凡感情を押へて唯々默して見守る許りでありました。敵襲、敵襲の報告を受けつつ、敵彈の下に他の戰死者と共に西住の遺骸を守つたあの周大庄の一夜は、終世忘れることの出來ない思ひ出であります。

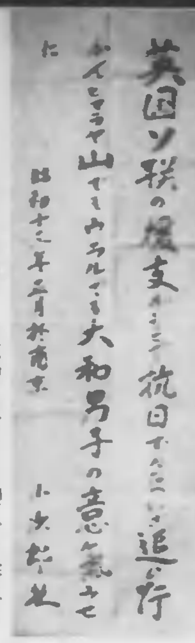
大尉は熊本縣甲佐の人、故步兵大尉西住三作氏の二男でありまして、陸軍士官學校第四十六期生であります。士官學校入校の時、已に今日あるを覺悟しておりました。茲に昭和八年一月父から小次郎宛の手紙があります。大尉が特に赤線を附しておる所を朗讀致します「進級なとを目當にしてはなりません。唯々一途に已れが本分を盡すと云ふ考へで學究奮勵すればいゝのです。若し將來戰死でもすれば勲績備です。私は御前さんが閣下になつた時以上の滿足を得る理です。私を忘れて奉公の覺悟で奮勵される樣希望します。父より　小次郎」とあります。出征前母堂に今度は生還を期せざるを誓ひ、陣中左の二首を堅書して愛唱して居ました。

武夫の習なりけり大君の
　御楯となりて朽ち果つるとも

親思ふ心に優る親心
　今日のおとづれ何んと聞くらん

又、平素何時戰死しても差支へない樣に、身の廻はりを整頓してありましたことは、大尉の近くに起居した兵が感心して居りました。戰死後、行李を見まするに、三十回に餘る小隊の部下の功績は詳細に整理してありました。實に立派な覺悟で、從容死に就いた戰死の情況と思ひ合せて、感銘深いものがあります。

茲に親愛敬仰する西住大尉の英靈に對し、謹みて誠を捧げて講演を終ります。

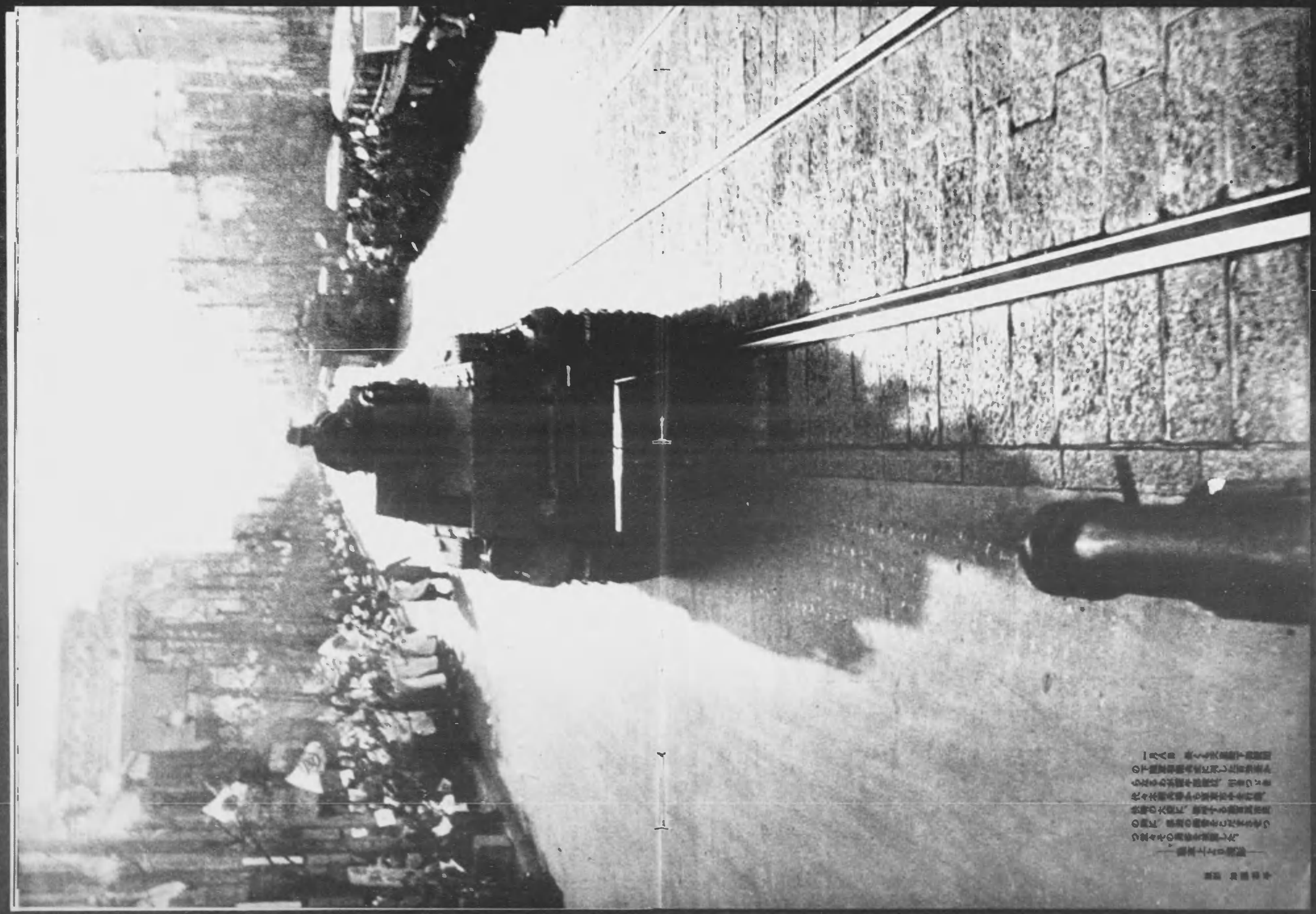


⇨南京一番乘りの戰功を樹てゝ迎へた昨年の正月、軍神がその燃える意氣を示した書初め

⇩西住大尉戰死の報をきいた大尉の母が細見部隊長に宛てゝ送つた書簡

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/



日本に活生を學ぶ
支那の少女たち

芝生のお庭に出ませう、ぼか〳〵と小春日和のやうに暖かい。

内地は平和な年の暮。日本の姉妹も支那の姉妹も同じ心、同じ服。樂しそうに日本ではじめてのお正月をあゝかしらとうかしらとおしやべりに花が咲く。

八日から學校が始まつた。新東亞建設といふ大きな目標に向つて小さい私たちも眞劍に努力しよう。日本語の勉強の時間。

今日のおひるは自由學園の卒業生を八十人も御招待する。御料理は本場の支那料理。買ひ出しから何までみんな自分たちの手でやつた、仕度する心もいそ〳〵と。

自分のことは一切人手をかりずに自分でする。責任あるハウスキーピングがその日〳〵の生活への精進だ。生活を樂しくするには拭掃除もふとん干しも忘れずに自分の手で。

撮影　内閣情報部

共に言葉を學び、共に生活を學び、共に技術を學ぶ　北京の生活學校は昨年五月創立されて以來、教育の部門から大陸の長期建設に積極的に協力してきた。ここに集まつた中國の少女たちは大地主の娘でもない、大金持のお嬢さんでもない極く平凡な北京の家庭の少女たちだ。今までの誤つた抗日教育をすてゝ新しい東亞建設のために手と手をしつかりと握つたのだ。そして半年の勉強の後、このお正月からあこがれの日本のお姉さんたちのゐる東京の自由學園に留學してゐる。大きな、抱負を小さな胸に秘めて。

留學生たちが東京についたのが去年の暮、十二月二十一日、はじめての日本で日本の姉妹たちに温かくとりかこまれて彼女たちはどんな年の暮を過し、どんなお正月をすごしたらうか。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

外はつめたい師走の風だが、内はあかあかとストーヴがもえる。自信のない手料理を日本のお姉さんたちにおいしく召し上つていただけるかしら。

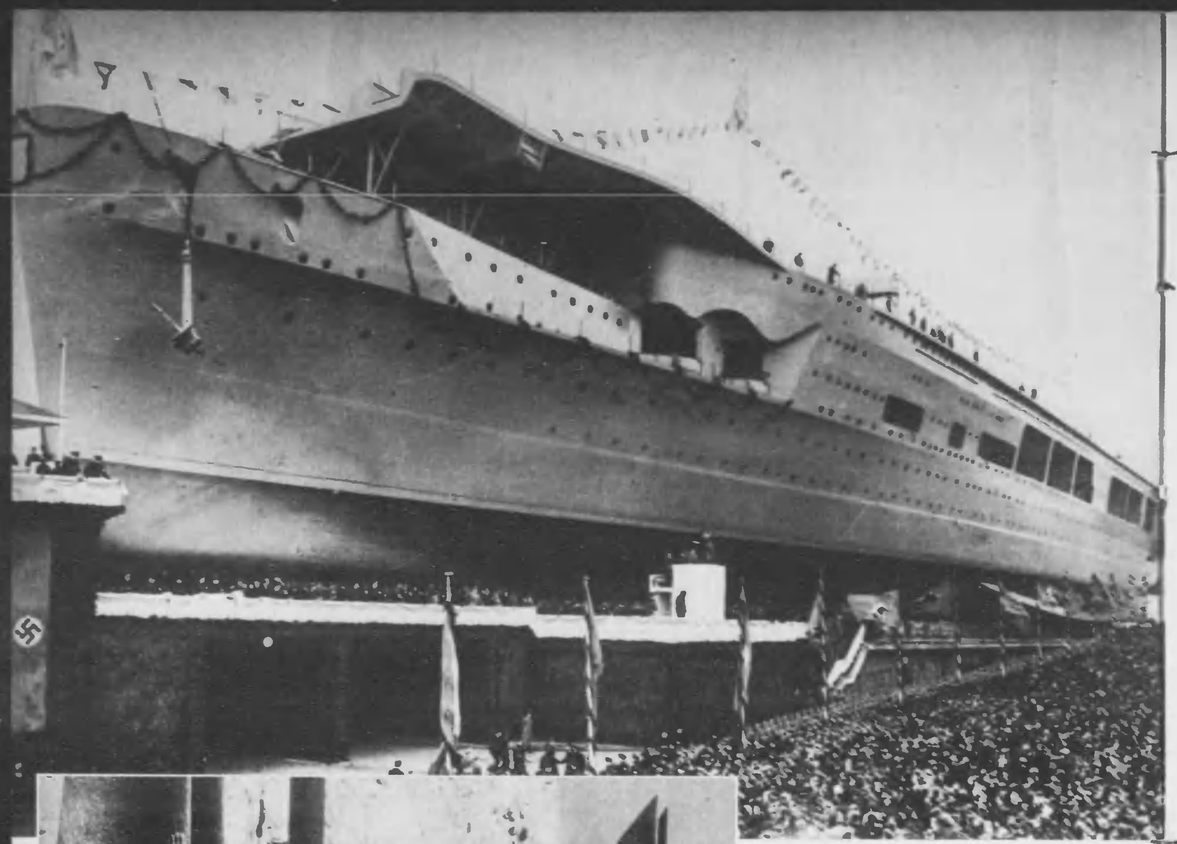
学園長の羽仁先生からそれ〳〵羽子板をいただいて無性によろこぶ彼女たち。追羽子の音が冴える。上氣してまつ赤なほつぺた。

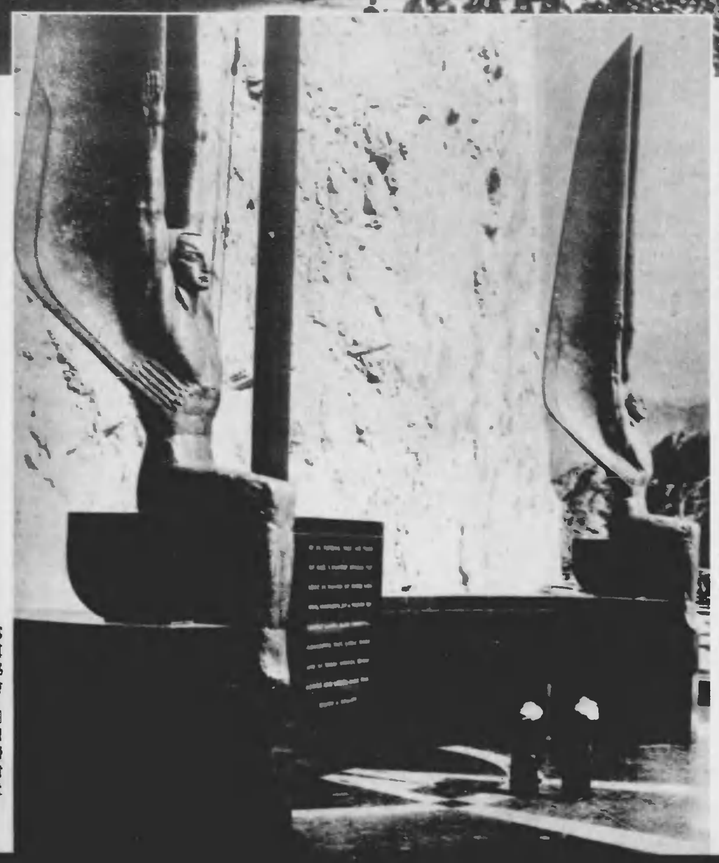
お正月休みにとこれも先生からいたいたいろはかるた。かるたの意味はよくわかるんだけど、肝心の手の方はなか〳〵先に出ない。

靜かな冬の夜、自習室の留學生たち。北京にゐるお父さんやお母さんのところへ樂しい日課のハガキ通信を今だしたところ。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

海外通信





宇宙線觀測の實驗氣球

七萬八千呎の上空、成層圏内で宇宙線の觀測をすべくアメリカ、フィラデルフィヤのフランクリン學會でトマス・ジョンソン博士により實驗氣球があげられた。六個の水素氣球に六ポンドの精密な機械が吊られて空高く目もとどかぬ上空へ揚げられた。

ノーベル賞授與式

一九三八年度ノーベル賞（文學、物理、平和）は瑞國スエーデン首都ストックホルムのコンサート・ホールでギュスタフ國王陛下自ら受賞者に授與された。文學賞受賞者は「大地」で有名なアメリカのパール・バック女史であつた。（下右）

ドイツに最初の航空母艦生る

ヴェルサイユ條約を破棄した新興ドイツは發刺たる意氣を以て國防の整備充實を急いでゐるが、かねてキール造船所で建造中であつた最初の航空母艦ツエッペリン伯號がヒットラー總統、ゲーリング空相等參列の下に晴れの進水式を行つた。裝備速力ともに優秀を誇り歐洲列强の新らしい脅威となつてゐる

星條旗大揚揚塔成る

アメリカのコロラド河からひかれたネヴァダ州のボウルダアダムにのぞむ一角に大國旗揚塔が竣工した。かつては砂漠に等しかつた不毛のこの土地に粒々辛苦の末發電ダムを造り肥沃にした科學と人力の勝利を永久に記念するものである。

寫眞協會・同盟通信社

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ニッサン バス

ニッサン

東京・丸ノ内 **日産自動車販賣株式會社**

⇨ **聖戦下の風掲會**

東京府村山 畑 健 ⇦

一月八日日比谷公園で行はれた恒例の風場會も聖戦第三年を迎へて今年はひときは時局を反映し、堅忍持久、盡忠報國と書いた風があちらこちらに掲つて居る

讀者のカメラ

⇨ **戰時下の戰車展覽會**

東京市芝區 高 宮 正

近代戰の陸の王者と謳はれる戰車展覽會が東京朝日新聞社主催、陸軍省後援の下に九段靖國神社境内と遊就館に一月八日から開かれた。

折からの寒さにもめげず、參觀者は軍神西住大尉をはじめ機械化部隊諸勇士の活躍の跡を偲び又機械化兵備の知識を吸收せんものとぞく〳〵つめかけた。

讀者のカメラ 應募規定

一、題材　國民精神總動員をテーマとした報道寫眞、一枚にても組寫眞にても可

二、印畫の大きさ　なるべくキャビネ判程度とし、裏面に寫眞說明及住所、姓名明記のこと

三、締切　毎週火曜日

四、賞品　内閣情報部賞銘牌

五、募集作品は一切返戻せず、また報道寫眞以外の版權は當部に歸屬す

★表 紙 ——

大尉の戰車に殘る彈痕數へ得るもの千餘個、正に鐵身瘡痍とでも申しませうか、本年二月南京に於て恐れ多くも朝香宮殿下當麾の御巡視遊ばされました際此の戰車を御覽遊ばされまして「此の戰車は御使へるか」との御言葉を賜りました。

大尉は當時兵と同様戰車乘務員の位置に直立して御言葉を拜し感激したのであります。——細見大佐の狀況報告から——

撮影 加藤德平

寫眞週報（業務報）

昭和十四年一月六日印刷發行

編輯兼發行者 内閣情報部 東京市麹町區永田町 内閣印刷局内

印刷者 内閣印刷局 東京市麹町區大手町

定價 一部十錢 一ヶ年（前金）二圓四十錢 半ヶ年（前金）一圓八十錢（外國郵便に依る場合は一ヶ年九圓十二錢 半ヶ年分未滿配達御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を添へ御申込み下さい）

申込所 内閣印刷局發行課 電話九ノ内(23)三五一ノ九 振替東京一九〇〇〇

全國各地官報販賣所 東都書籍株式會社 各書店・驛賣店 各新聞販賣店 寫眞材料店

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

寫眞週報　昭和十三年二月十一日　第三種郵便物認可　昭和十四年　月十八日發行　毎週一回土曜日發行　第四十八號

發育期の兒童に

肝油が一ばん必要な冬です

皮膚はもちろん、呼吸器や胃腸粘膜を冒され易い冬です。豫防には先づ脂肪性の榮養が必要で、就中、ADを多量に必要とします。この生理的要求を無視するとかぜを引きます、皮膚が荒れ凍傷になります、視力が衰へます。豫防には肝油ですハリバです

殊に皮膚や粘膜がまだ丈夫になり切らぬ發育期の兒童にハリバが必要です。寒さに對する抵抗力が弱いためかぜを引き易く、腺病質や結核もこのかぜから移行します。せめて冬だけはハリバを休まず續けて上皮の防壁を固めることです

ハリバは從來の肝油と全く異り、ADの極めて濃厚な高單位肝油を油塊のまゝ小豆大の鯛衣粒としたもの…一粒は一匁の肝油に相當し、一日一―二粒で足り、臭くなくお腹にもたれず、どんな肝油嫌ひな兒童でも喜んで運用し得ます。

百粒…二圓五十錢　五百粒…十圓五十錢

内閣印刷局印刷發行

（新信「報週」・A4格規定國はさ大の書本）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/